

究極目的への運動

－トマス・アクィナスにおけるペルソナの可能性－

佐々木 亘

Man's Movement to the Ultimate End

－On the Possibility of the Person in Thomas Aquinas－

Wataru Sasaki

トマスによると、人間の行為は目的のために為され、その倫理的な性格は目的から受けとられる。目的は人間の行為の根源であり、終局である。その一方、人間の行為は意志と理性に基づくが、意志は至福である究極目的に密着しており、究極目的は意志のはたきそのものを可能にする根源である。このかぎりにおいて、人間の行為は究極目的への運動という仕方であらうか。そして、この運動において個としてのペルソナにはどのような可能性が認められるのであろうか。

Key Words: [ペルソナ] [自己] [他者] [究極目的] [主権]

(Received November 16, 2011)

序

本稿は、「共同体と連帯性－トマス・アクィナスにおけるペルソナと共同善－」という博士論文における、第一部「“dominus”としてのペルソナ」の第一章「究極目的への運動」に対応する予定の部分である。この博士論文は、ペルソナに関する詳細な分析を通じて、連帯性という観点からトマスの共同体論の普遍的解釈をめざしている。

たしかに、ペルソナとしての人間は共同体に還元されえない超越性を有している。しかし、「全体の善がそのいかなる部分にとっても目的 (finis) であるように、共同善 (bonum commune) は、共同体 (communitas) のうちに存在している個別的な個々のペルソナ (persona) にとっての目的である」⁽¹⁾かぎりにおいて、ペルソナは共同体の部分として位置づけられる。したがって、ペルソナの超越性を共同体のうちに正しく位置づけることなしに共同体の普遍性を提示することは不可能である。共同体論は、「ペルソナとは何か」という問いを深めていくことにより、時間と空間を越えた普遍性を持ちうることになる。キリスト論がトマスの思想の根幹をなして

*鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

いることは疑いようのない事実であるが、筆者は逆にこのキリスト論のうちにトマスの普遍的解釈の可能性が存していると考えている。

ところで、先の引用では、続いて、「しかし、一人の個別的なペルソナの善は、他のペルソナの目的ではない」と言っている⁽²⁾。すなわち、ペルソナが共同体の部分として位置づけられるのは、共同善がペルソナとしての超越性をさらに超えたある種の普遍性を有するからにはかならない。そして、かかる普遍的な超越性を目的とする仕方では、ペルソナは共同体の部分である。その一方、一人のペルソナの善が他のペルソナの目的とされるわけではない。個々のペルソナが目的とするのは、あくまで共同善であり、この前提のもとに、おのおののペルソナは相互に秩序づけられる。

ペルソナそのものが目的ではないという指摘は、非常に重要であると思われる。たとえば、教師に弟子が秩序づけられるのは、その教師の有する善のゆえである。そのかぎりにおいて、弟子は教師の善を目的としているという表現は可能である。しかし、その場合でも、より正確には、教師が示す真理を共同善として秩序づけられなければならない。そうでなければ、他のペルソナへの支配欲さえ、極端な場合正当化されうることになる。夫婦や親子の関係においても、共同善への秩序のもとに、「他者の善」が求められなければならないのである。

ペルソナと共同善との関係を明らかにすることが、最終的な目標であり、この課題は別の稿で論ずるとしても、「ペルソナそのものが目的ではない」という点は、重要な指針となる。本稿では、このことを念頭におきながら、究極目的への運動におけるペルソナの可能性について考察していきたい⁽³⁾。

I. ペルソナとしての人間

まず、そもそもペルソナとは、何を意味するのであろうか。トマスは、『神学大全』第一部第二九問題第一項で、「理性的本性を有する個別実体 (rationalis naturae individua substantia)」という「ペルソナの定義」について論じており、その主文で次のように言っている。

自らのはたらきの「主権 (dominium)」を持ち、他のもののようにたんに動かされるだけではなく、「自体的な仕方 (per se)」はたらくところの、「理性的実体」においては、「個別的 (particularis)」、*「個的 (individuus)」*なものが、何らかの「より特別」、*「より完全」*な仕方で見出される。じっさい、諸行為は「単一者 (singularia)」のうちに存する。それゆえ、他の諸実体の中で、理性的本性を持った単一者は、何らかの特別な「名 (nomen)」を有している。そして、この名が「ペルソナ」である。それゆえ、先に示したペルソナの定義では、実体の類における単一者を表示するかぎりにおいて「個別実体」と措定され、さらに理性的な実体における単一者を表示するかぎりにおいて「理性的本性を有する」という点が加えられている⁽⁴⁾。

ペルソナとは、たんなる個的な実体を意味するわけではない。犬や猫のような生物であれ、石などの無生物であれ、存在するものは何らかの仕方では「個物」として捉えられる。しかるに、

理性を有する者は、自らのはたらきに関して主権を有するという点で、自らを自体的な仕方ですなわち自らによって動かすことができる。これに対して、理性を持たないものは、ただ動かされるだけで、自らによって自らを動かすことはない。

たしかに、犬や猫のような動物は、他者から動かされるというより、自らの足で動きまわっているようにも思われる。感覚を有するものは、自己の保存と種の保存のために動くのであるが、問題はその運動においてかかる動物が自体的にはたらいているかという点である。トマスは、『神学大全』第二—一部第一問題第二項で、「目的のために行為することは理性的本性に固有であるか」を問題にしており、その主文で次のように言っている。

何かは自らの行為なり運動によって、二通りの仕方でも目的へと向かう、ということを考えなければならぬ。一つは、「人間」のように、「自分自身を目的へと動かす」という仕方である。もう一つは、「矢」が、自らの行為を目的へと導くところの「射手」によって動かされることから、限定された目的へと向かうように、「他のものから目的へと動かされる」という仕方である。それゆえ、理性を有する者は、自らを目的へと動かす。なぜなら、「理性 (ratio)」と「意志 (voluntas)」の機能である「自由意思 (liberum arbitrium)」によって、自らのはたらきに対する「主権」を有しているからである。これに対して、理性を欠くものは、自らによってではなく他の者から動かされるように、「自然本性的な傾き (inclination naturalis)」によって目的へと向かう。それらは目的としての性格を認識しないから、何も目的へと秩序づけることはできず、ただ他の者から目的へと秩序づけられるだけである。じっさい、先に述べられたように、「非理性的本性全体」は「神」に対して、「道具 (instrumentum)」が「根源的能動者 (agens principale)」に対するように関係づけられる。そして、それゆえ、「自ら目的へとはたらき、導く者」として目的へと向かうということは、理性的本性に固有なことである⁽⁵⁾。

たしかに、運動はすべて、何かを目的とすることから成立している。このような目的論的世界観は、現在のわれわれにとって自明とは言い難い。われわれを取り巻くさまざまな危機的状況の中で、何を目的としているのかが判別しにくい事例に取り囲まれている。たとえば、日本では一三年連続で、年間三万人以上の自殺者を生み出し続けている。自殺という行為は、明らかに「個の保全」という自然本性的傾きに反している。しかし、自殺は、決して個人の個人的な問題ではなく、共同体が抱える根元的な問題である⁽⁶⁾。もちろん、自殺にはさまざまな要因が複雑にからみあっていると看做しても、目的論的な視点からは、自殺は、残念ながら、自己の保全を超える目的への運動として捉えられるであろう。

トマスの思想は目的論的な地平によって成立している。そして、「目的への運動」は、理性の有無によってまったく異なった内容になる。理性を欠いたものは、たしかに何らかの限定された目的をめざして運動するとしても、その運動は自然本性的な傾きによって決定された運動であり、「他のものから目的へと動かされる」にすぎない。その運動は、ただ動かされるのみであり、そこに「自由」や「自体的性」を見出すことはできない。なぜなら、「目的としての性格を認識しないから、何も目的へと秩序づけることはできず、ただ他の者から目的へと秩序づ

けられるだけ」だからである。目的としての性格を認識することは、理性によって可能になる。

これに対して、理性的存在である人間は、「理性と意志の機能である自由意思によって、自らのほたらきに対する主権を有しているから」、「自分自身を目的へと動かす」ことができる。この点が、トマスの人間理解の根本である。そして、この主権のゆえに、人間はペルソナとして位置づけられる。トマスの人間論は、まさにここからはじまるのである。

II. 人間の運動とペルソナ

では、「自らのほたらきに対する主権」とは、そもそも何を意味するのであろうか。トマスは、主著である『神学大全』の構成を、その冒頭の個所で次のように示している。

この聖なる教えの根源的な意図は、神に関する認識を伝えることであり、それは、先に述べられたことから明らかなように、たんにご自身においてあるかぎりだけではなく、諸事物の、とくに理性的被造物の根源であり、その究極であるかぎりの、神に関する認識を伝えることである。それゆえ、この教えの開示を目指して、われわれは、第一に神について、第二に理性的被造物の神への運動について、第三に、人間であるかぎり、われわれにとって神へと向かう道である、キリストについて、論ずることになるであろう⁽⁷⁾。

『神学大全』においてトマスが意図しているのは、神を主題とする「聖なる教え」を明らかにすることにほかならない。それは「神に関する認識を伝えること」であるが、たんに神自身に関する認識だけではなく、諸事物の根源と究極としての神に関する認識である。さらに、特別な仕方でも問題にされるのは、ペルソナである人間についての神の認識となる。じっさい、理性的被造物には、天使と悪霊、そして人間が含まれており、人間の理解にとって天使論や悪霊論は重要である。しかし、われわれ人間にとっては、人間の幸福と救済が何より問題となるであろう。

そのため、『神学大全』は、神に関する第一部、人間の神への運動に関する第二部、われわれが神への向かう道であるキリストに関する第三部の、三部構成になっている。ただし、第一部においても、人間に関するきわめて重要な議論がなされている。それは、三位一体論におけるペルソナや「似姿 (imago)」の規定、創造論における人間の能力や“imago”の産出、そして統率論における人間の主権などである。そして、問題となるのが、第一部と第二部との関係である。トマスは、第二部冒頭にある「序言 (prologus)」で、次のように言っている。

ダマスケヌスが言うように、“imago”によって、「意思」が「自由」で自体的な仕方で行為できるという、知性的なるものが表示されるかぎりにおいて、人間は神の“imago”へと造られたと言われる以上、「範型 (exemplar)」すなわち神について、そして、神の「意志」にしたがって、その「権力 (potestas)」から発出してきたものについて述べられた後に、かかる範型の“imago”，すなわち「人間」に関して考察することが、われわれに残されている。それは、「自由意思」と自らの行動の権力を持つ者として、人間もまた自らの行動の

根源であるかぎりにおいてである⁽⁸⁾。

ここでトマスは、第一部と第二部との関係を、「範型」とその“imago”に関する考察として説明している。第一部で展開された人間に関する深遠な考察は、全体的には範型である神の認識にかかわっている。知性と理性、意志と自由意思に関するきわめて詳細な議論も、あくまで範型である神にもとづく創造論である。これに対して、第二部では、「自由意思と自らの行動の権力を持つ者として、人間もまた自らの行動の根源である」ところの“imago”に関する考察であり、それはまさに、「自らのはたらきの主権を持ち、他のもののようにたんに動かされるだけではなく、自体的な仕方ではたらく」ところの、ペルソナの運動に関する議論なのである。

Ⅲ. 人間的行為とペルソナ

では、「自らのはたらきの主権」とは、どのようなことを意味しているのであろうか。トマスは『神学大全』第二部冒頭の「序言」で、第二部全体を“imago”である人間に関する考察と位置づけていることから、「理性的被造物の神への運動」は“imago”という観点から展開されると思われる。しかるに、トマスは、序言に続く第一問題第一項の主文で、次のように言っている。

人間によって為される行為の中で、人間であるかぎりの人間に固有な行為だけが、本来の意味で人間的と言われる。しかるに、人間が他の非理性的被造物から異なっているのは、自らのはたらきの「主 (dominus)」であるという点においてである。それゆえ、人間がその“dominus”であるところの行為が、本来、人間的と呼ばれる。さらに、人間は、理性と意志によって自らのはたらきの“dominus”であるから、自由意思はまた、意志と理性の機能であると言われている。それゆえ、本来の意味で人間的と言われる行為は、考量された意志から発出する行為である。これに対して、何か他の行為が人間に適合するならば、たしかに人間の行為と言われうるが、人間であるかぎりの人間の行為ではないので、本来、人間的行為ではない。ある能力から発出する行為はすべて、能力の対象が有する性格にそくして、その能力から原因されることは明らかである。しかるに、意志の対象は、目的かつ善である。それゆえ、すべての人間的行為は目的のためにあるものでなければならない⁽⁹⁾。

自らのはたらきの主権を有するということは、自らのはたらきの主であることにほかならない。たしかに、人間は、範型である神を根源と究極とするところの被造物である。とくに、身体的な側面から捉えるかぎり、時間的にも空間的にもきわめて限定された存在であり、人間の弱さや醜さに関しては枚挙に暇がない。

しかし、自らのはたらきに関しては、神ではなく人間が“dominus”である。もちろん、このことは、自らのはたらきに関して、人間が神からいかなる権力も行使されないということの意味しているわけではない。存在するものはすべて、永遠法のもとにあり、神によって統率さ

れている。じっさい、「神によって造られていないものは何もあり得ないように、また、神の統率のもとに服していないものは何もありえない」⁴⁰⁾。すべては、根源である神によって創造され、究極である神によって統率されている。

しかし、人間は、神を範型として生み出された“imago”であり、「自由意思と自らの行動の権力を持つ者」として、「自らの行動の根源」である。その結果、「自分自身を目的へと動かす」という仕方で、自らはたらしきの“dominus”であり、この主権は理性と意志、そして両者の機能である自由意思によって可能になる。そして、人間が“dominus”であるかぎり、人間が為す「人間的行為」は、おのおのの人間に帰せられる個別的な行為となるであろう。それはまた、「神への運動」における個別性である。人間が「理性的本性を有する個別実体」としてのペルソナであるのは、かかる“dominus”としての主権と、それにとまなう人間的行為の個別性にもとづいていると考えられる。

結び 究極目的への運動

では、「神への運動」とは、われわれにとって、いったい何を意味しているのであろうか。「意志の対象は、目的かつ善である」から、「すべての人間的行為は目的のためにあるものでなければならない」。意志は、理性がなんらかの善のうちに目的としての性格を認識することにより、その善を目的として欲求する。そして、このような認識と欲求にもとづいて、人間的行為は現実化される。すなわち、「本来的な意味で人間的と言われる行為は、考量された意志から発出する行為」であり、したがって、「すべての人間的行為は目的のためにあるものでなければならない」。

しかるに、意志のはたらきは、それ自体は自由であるとしても、根元的な必然性から成立している。トマスは、『神学大全』第一部第八二問題第一項の主文で、「必然」を、内的根源に基づく「自然本性的で絶対的な必然 (necessitas naturalis et absoluta)」と、外在的な何かに基づく「目的の必然 (necessitas finis)」, 及び「強制の必然 (necessitas coactionis)」にそれぞれ分け、前者に関して次のように言っている。

「自然本性的な必然」は意志に背馳しない。かえってむしろ、知性が必然にもとづいて「第一基本命題 (prima principia)」に密着しているように、意志は必然にもとづいて「至福 (beatitudo)」である「究極目的 (ultimus finis)」に密着していなければならない。(中略) じっさい、あるものに自然本性的かつ不動な仕方で適合するものは、他のすべての「基礎」(fundamentum)」であり「根源」でなければならない。「事物の本性」はおのおのにおける「第一のもの」であり、すべての運動はある「不動なもの」より発出するからである⁴¹⁾。

意志は必然的な仕方で至福である究極目的に密着している。この究極目的への根元的な欲求が、人間的行為の原動力である。このかぎりにおいて、「神への運動」とは、「究極目的への運動」として捉えられよう。人間が神へと向かうのは至福になるためであり、この「完全な幸福への運動」がペルソナとしての人間にゆるされた、「自体的なはたらき」によって可能になる。

そして、この究極目的への必然的欲求という点で、「一人の個別的なペルソナの善は、他のペルソナの目的ではない」ということも明らかであろう。

この究極目的への運動は、ペルソナとしての、“imago”としての、そして自らのはたらきの“dominus”としての「主権」において展開される。人間がペルソナであるということの意味と可能性は、究極目的への運動にかかっている。意志による究極目的への欲求が必然的であるとしても、いかなる善を目的とするかは、人間の主権のうちに存しているからである。

略号

- S.T.* Thomas Aquinas, *Summa Theologiae* (『神学大全』), ed. Paulinae, Torino, 1988.
- 佐々木2011 佐々木亘「人間における連帯性－トマス・アクィナスにおける自然本性の理解をめぐる－」, 『経済社会学会年報』第33号, 74－83頁。

註

- (1) *S.T.* II-II, q.58, a.9, ad 3. bonum commune est finis singularum personarum in communitate existentium, sicut bonum totius finis est cuiuslibet partium.
- (2) *S.T.* II-II, q.58, a.9, ad 3. Bonum autem unius personae singularis non est finis alterius.
- (3) 筆者は、永合位行神戸大学教授を研究代表者とする共同研究の研究分担者として、科学研究費補助金（基盤研究（C） 21530181：平成21年度～24年度）の交付を受け、「多元的秩序構想における経済学統合化の試み－中間組織の経済倫理学に向けて－」という研究課題にも取り組んでいる。この共同研究は経済学の分野におけるものではあるが、今回の博士論文に関して、筆者はそこから「連帯性」という具体的な展望を受けることができた。
- (4) *S.T.* I, q.29, a.1, c. Sed adhuc quodam specialiori et perfectiori modo invenitur particulare et individuum in substantiis rationalibus, quae habent dominium sui actus, et non solum aguntur, sicut alia, sed per se agunt: actiones autem in singularibus sunt. Et ideo etiam inter ceteras substantias quoddam speciale nomen habent singularia rationalis naturae. Et hoc nomen est persona. Et ideo in praedicta definitione personae ponitur substantia individua, inquantum significat singulare in genere substantiae: additur autem rationalis naturae, inquantum significat singulare in rationalibus substantiis.
- (5) *S.T.* I-II, q.1, a.2, c. Tamen considerandum est quod aliquid sua actione vel motu tendit ad finem dupliciter; uno modo, sicut seipsum ad finem movens, ut homo; alio modo, sicut ab alio motum ad finem, sicut sagitta tendit ad determinatum finem ex hoc quod movetur a sagittante, qui suam actionem dirigit in finem. Illa ergo quae rationem habent, seipsa movent ad finem; quia habent dominium suorum actuum per liberum arbitrium, quod est facultas voluntatis et rationis. Illa vero quae ratione carent, tendunt in finem per naturalem inclinationem, quasi ab alio mota, non autem a seipsis: cum non

cognoscant rationem finis, et ideo nihil in finem ordinare possunt, sed solum in finem ab alio ordinantur. Nam tota irrationalis natura comparatur ad Deum sicut instrumentum ad agens principale, ut supra habitum est (I, q.22, a.2, ad 4; q.103, a.1, ad 3.) . Et ideo proprium est naturae rationalis ut tendat in finem quasi se agens vel ducens ad finem.

- (6) 佐々木2011, 81頁参照。
- (7) *S.T.* I, q.2, intro. Quia igitur principalis intentio huius sacrae doctrinae est Dei cognitionem tradere, et non solum secundum quod in se est, sed etiam secundum quod est principium rerum et finis earum, et specialiter rationalis creaturae, ut ex dictis est manifestum (q.1, a.7) ; ad huius doctrinae expositionem intendentes, primo tractabimus de Deo; secundo, de motu rationalis creaturae in Deum; tertio, de Christo, qui, secundum quod homo, via est nobis tendendi in Deum.
- (8) *S.T.* I-II, prologus. Quia, sicut Damascenus dicit, homo factus ad imaginem Dei dicitur, secundum quod per imaginem significatur intellectuale et arbitrio liberum et per se potestativum; postquam praedictum est de exemplari, scilicet de Deo, et de his quae processerunt ex divina potestate secundum eius voluntatem; restat ut consideremus de eius imagine, idest de homine, secundum quod et ipse est suorum operum principium, quasi liberum arbitrium habens et suorum operum potestatem.
- (9) *S.T.* I-II, q.1, a.1, c. actionum quae ab homine aguntur, illae solae proprie dicuntur humanae, quae sunt propriae hominis in quantum est homo. Differt autem homo ab aliis irrationalibus creaturis in hoc, quod est suorum actuum dominus. Unde illae solae actiones vocantur proprie humanae, quarum homo est dominus. Unde illae solae actiones vocantur proprie humanae, quantum homo est dominus. Est autem homo dominus suorum actuum per rationem et voluntatem: unde et liberum arbitrium esse dicitur facultas voluntatis et rationis. Illae ergo actiones proprie humanae dicuntur, quae ex voluntate deliberata procedunt. Si quae autem aliae actiones homini convenient, possunt dici quidem hominis actiones; sed non proprie humanae, cum non sint hominis in quantum est homo. Manifestum est autem quod omnes actiones quae procedunt ab aliqua potentia, causantur ab ea secundum rationem sui obiecti. Obiectum autem voluntatis est finis et bonum. Unde oportet quod omnes actiones humanae propter finem sint.
- (10) *S.T.* I, q.103, a.5, c. Unde sicut nihil potest esse quod non sit a Deo creatum, ita nihil potest esse quod eius gubernationi non subdatur.
- (11) *S.T.* I, q.82, a.1, c. necessitas dicitur multipliciter. Necessitas enim quod non potest non esse. Quod quidem convenit alicui, uno modo ex principio intrinseco:..... Et haec est necessitas naturalis et absoluta. –Alio modo convenit alicui quod non possit non esse, ex aliquo extrinseco, vel fine vel agente:..... Similiter etiam nec necessitas naturalis repugnat voluntati. Quinimmo necesse est quod, sicut intellectus ex necessitate inhaeret primis principiis, ita voluntas ex necessitate inhaereat ultimo fini, qui est beatitudo: finis enim

se habet in operativis sicut principium in speculativis, ut dicitur in II *Physic*. Oportet enim quod illud quod naturaliter alicui convenit et immobiliter, sit fundamentum et principium omnium aliorum: quia natura rei est primum in unoquoque, et omnis motus procedit ab aliquo immobili.

本稿は、平成23年度科学研究費補助金（基盤研究C）による、研究成果の一部である。

